

回想——農芸化学の発展を 祈念して



九州大学名誉教授
大島 康義
日本農芸化学会名誉会員、
元会長

私は大正 14 年に東京大学農芸化学科に入学しました。前年までは希望者が定員 50 名に足りなかったのですが、この年からは若干超過するようになり入学試験が行われました。私はもちろんこんなことになるとは思いも及ばず金沢の兄の所に遊びに行ってしまっておりました。自宅からの電報で知らせをもらい驚いて帰京して受験しました。幸いに超過数がごくわずかでありましたので無事入学できました。農芸化学というものが世間に認識され始めたとでもいうことでしょうか。

農芸化学会は入学の前年大正 13 年の創立であります。入学当時に今入会したら会誌を 1 卷 1 号からもらえるという勧誘がありましたので、早速手続きをしました。卒業後私は台湾の大学に勤めることになり、終戦により引き揚げましたが、この会誌の 1 卷 1 号からの蔵書はとても重いので持ち帰ることができず、台湾の友人に寄贈してきました。おそらく今でも台湾で役にたっていることと思います。

会誌第 1 号にのっている学術報告をみると次のよう�습니다。すなわち

麹菌により生産せらるる麴酸 (γ -ピロン誘導体) の構造について 農博 蔡田貞治郎

米蛋白質オリゼニンの粳糯による差異に就て 第一報 農博 田所哲太郎

農 中村幸彦 渡辺修吉

緑茶中のビタミン C に就て 医博 三浦政太郎
 辻村みちよ

醸造物中の膠状態と「インタフェロメーター」 農博 高橋貞造

農 大町芳文

となっております。これらは今日の農芸化学の隆盛な領域をチャント示しております。たとえば蔡田先生のものは、天然物化学または微生物生産物の化学の草分けであり、北大生化の田所先生・中村さんは食品化学・蛋白

質化学のはしりであり、三浦さん（夫人はオペラ蝶々夫人を歌って有名な環さん）のはビタミン（表題はヴィとなっています）でかつ当時の動物試験の模様がわかり、高橋先生のは微生物の領域といったわけであります。さらに領域をどんどん拡張して今日にいたっております。

こうやって学会ができる、会員の研究業績の発表ができるようになったことは、農芸化学という領域の大発展のもとになったと思います。これまでになるには先輩の方方の大変なご苦労ご努力があったことと感謝に堪えません。

私が卒業したのは昭和 3 年ですが、在学中の総長は農芸化学の大先輩古在由直先生であります。先生の大学卒業は明治 19 年となっておりますので、この年から数えますと今年でちょうど 100 年になるわけあります。私どもの卒業記念の写真のアルバムを作るために、本郷の総長室に参って 1 枚撮らせていただきました。大先輩にお目にかかる光栄に思いました。

農芸化学会の例会は階段教室で行われておりました。鈴木・麻生・高橋・蔡田・平塚・川瀬の教授の先生方が前のほうに陣取り、研究報告が終ると簡単な質問がありました。いつも鈴木先生は「一体この研究をやって何の役にたつか」といわれたのが今でも印象に残っています。この「何の役にたつか」ということが農芸化学の重要な内容になって今まで引きつがれてきております。この階段教室を出るとすぐ、テニスコートや野球グラウンドがあり、鈴木研究室の大学院の先輩たちでなかなか盛んに野球を楽しんでおられました。蔡田先生が名三塁手であり住木前会長が強打者であったと伝えられています。先年昔の級友を誘って今の駒場を散歩してみたことがありましたが、野球場が昔の位置と思える近くにあり、農化の教室もこの辺りだったのだろうと見当がつき、大変懐しく昔をしのぶことができました。

この駒場の構内に、入って少し左に行った樹蔭に、

「駒場農学の碑」という石碑が建っております。碑面に
駒場農学園ハ明治拾壱年零月貳拾四日
明治天皇親ク此處ニ開校ノ典ヲ賜ゲ給ヒショリ
始メ駒場農学校ト称シ中頃東京農林学校終ニ
東京帝國大学農学部ト改メ始終我國農林畜産
水産各事業の渦源ヲナセリ今ヤ学園ハ一層ノ
發展ヲ期シ此地ヲ去ツテ別ニ所ヲ得タリ然レ
ドモ吾等此處ニ業ヲ卒フル者追憶思慕何ソ
勝ヘン茲ニ碑ヲ建テ永ク記念ノ標識トス

昭和十一年三月吉日 高橋慎造書

同学卒業者関係者建之

とあります。いっそうの発展を期して駒場を去り本郷の他学部と同じ地域に合して、だんだんと間口を広げて発展してきた次第であります。

農芸化学はこの農学のうち、生命現象および生体物質を化学的な立場から解析して、その知見を生産の場に適用することを主たる内容として進んできました。農というと百姓仕事というような小さな考えになりがちですが、生命および生命による生産を援助することを農と考えたいと思います。

学会のほうも従ってだんだんと会員数も増し、地域も広くなって各地に支部ができるようになりました。昭和11年4月には西日本支部（初代支部長は鹿児島高農の吉村清尚氏）ができ、当時台湾におりましたので西日本支部に所属することになりました。しかしこの当時では台湾と九州は船でやっと3日目に着くというわけでたいへん遠く不便がありました。それでその年の12月には台湾支部（支部長は中央研究所部長兼台北帝大教授の中沢亮治氏）が設立されました。こうやって北は北海道から南は台湾まで広く活躍できるようになりました。とくに台湾においては酒が専売制度となっており、独特のアミロ法で酒精を製造しており、この研究や製造は農芸化学の活躍の舞台がありました。大学ができたからはこれに加えるにさらに製糖・製茶等の食品に関する研究もおおいに行われました。

台湾において、いろいろな大先生の視察などのご案内など申して、ご教示を得た点が多くあります。鈴木梅太郎先生は主として総督府の案内だったので私などご案内のはしにつらなることができませんでしたが、聞くところによるととくに米（ほうらい米）と糖業に关心をよせられたようありました。蔽田貞治郎先生は、学会関係のご案内が多く、私も農業試験場その他のご案内を申しあげました。印象に残っているのは農業試験場の植物病理の研究室で、稻の馬鹿苗病菌の培養をご覧になったときでした。まことにご熱心に説明をきかれさらに質問をされておりました。台湾については被害がかなりあり、この菌の培養研究をしておられた沢田兼吉氏はこのときすでに退官されておられましたが、研究室ではこの研究が引きつがれておりました。すでに微生物の生産物の研究を行われておられた先生には、培養液中に徒長さす物質が生産されているだろうことがピンときておられたのでしょう。ジベレリンの研究の発展につれ、私どもの凡庸には初めてはあ、そうだったのかと思いついたるわけであります。

学会が進んで大きくなるにつれ、1960年代に一時「農芸化学とは何か」、「何をやるべきか」ということが論議されたことがあります。また外国にちょうど日本の農芸化学にピッタリの相当学会がなくて不便だ、不都合だという意見が出たこともあります。わが国の農芸化学の範囲が広く独特の発展をきたした結果で、むしろその独自性を誇るべきものと考えます。

いったい学問の範囲は規制したり、志向を指定したりすべきものではなく、自由に研究発展し、勝手に進歩したらよいものと思います。とくに農芸化学はわが国で独特の発展をしてきたものですから、ますますその行き方で進んだらよいと考えております。何をやってもよい、常に進むところに農芸化学があると思います。近代化、バイオの時代、どんどん好きなことをやって発展していただきたい。